

【一】

関が原の一戦以来、鬱積した大阪方の憤懣と、老獪徳川家康公の制覇工作の進展とは、遂に両者の間に正面衝突を起す可き時節が到来した。時は慶長十九年の秋、関東大阪御手切れの報は、疾風の如く津々浦々に伝へられ、之と同時に両軍の味方獲得の密使は國々へ飛んだ。

云ふ迄も無く、我が徳島藩渭ノ津城へも、豊臣家の使者として早くも木俣半之丞と云ふ者が、秀頼公の依頼状と大野修理治長の書面を携へて乗込んで来た。城内の大廣間には、藩主蜂須賀阿波守至鎮公、其父蓬庵公（家政）を始め、家中の面々綺羅星の如く居並んだ所へ、使者を引見して書面を受け取ったが、其返事は至って簡単なものだった。

「我藩は無二の関東方で御座るに依つて、折角ながらお味方の義はお断り申す」と、木で鼻を括ったやうな挨拶で、而も蓬庵公は使者に向かって言葉を強めて、「以来此義に就て使者を遣わす時は、何人たりとも斬つて捨てる可しと秀頼公に申上り。者共その使いを追ひ返せ！」と浴せかけた。使者は取附く島も無く悄然として引下つて行った。

この「無二の関東方」と云つたのには理由がある。ソレは、去る慶長五年関ヶ原の戦ひに、家政公が大阪城とは目と鼻の玉造の屋敷に居ながら、秀頼公の軍勢催促にも

應^{おう}ぜず、蟄^{ちつきよ}居^いして出^でなかつた罰^{ばつ}に依^よつて、太^{たい}閤^{こう}以^い來^{らい}の領^{りょう}地^ち阿^あ波^わ國^{こく}を没^{ぼつ}収^{しゅう}せられた。
(此時^{このとき}に、家^{いえ}政^{せい}公^{こう}は薙^{てい}髮^{はつ}して、蓬^{ほう}庵^{あん}と名^なを改^{あらた}めた)。だ^が此^{この}戰^{たたか}は手^ても無^なく徳^{とく}川^{がわ}の勝利^{しょうり}に帰^きし、日^ひなら^ずして、家^{いえ}康^{やす}公^{こう}から阿^あ波^わ一^{いつ}國^{こく}を其^{その}子^こ豊^{とよ}雄^{ゆう}(後^{のち}の至^{よし}鎮^{しげ}公^{こう})に興^{あた}えられ
たといふ行^い察^{さつ}が有^あるので、謂^いはば今^{いま}では、豊^{とよ}臣^{しん}家^けとは縁^{えん}が切^きれて居^いるからと云^いふ意味^{いみ}の
様^{よう}だ。

更^{さら}にまた蓬^{ほう}庵^{あん}公^{こう}が、使^し者^{しや}に對^{たい}する言^{こと}葉^ばが穩^{おだ}やかで無^なかつたにも訳^{わけ}がある。即^{すなわ}ち此^{この}時^{とうじ}
予^{あらかじ}め調^{ちよう}査^さした処^{ところ}に縁^よると、藩^{はん}士^しの内^{うち}には、大^{おお}阪^{さか}籠^{かご}城^{じょう}の士^しに知^ち己^きが多^{おほ}く、特^{この}に此^し使^し者^{しや}
である木^{きの}俣^{また}半^{はん}之^の丞^{じやう}に對^{たい}しては、好^{こう}意^いを寄^よせる者^{もの}が頗^{すこぶ}る澤^{たく}山^{さん}有^あつたから、夫^{それ}等^らの者^{もの}を
戒^{かい}飾^{しよく}する為^{ため}で有^あつたと傳^{つた}へられる。

兎^とも角^{かく}も此^{この}の関^{せき}ヶ原^{がはらの}役^{えき}不^ふ参^{さん}加^かの理^り由^{ゆう}は分^{ぶん}明^{めい}で無^ない。尤^{もつと}も表^ひ面^{やうめん}は、「豊^{とよ}家^けの基^き礎^そを危^{あやう}
くする、石^{いし}田^だ、小^こ西^{にし}の如^{ごと}き佞^{ねい}人^{じん}の企^{くわだ}てには興^{くみ}しない」と云^いふのでは有^あるが。……甚^{はなは}だ
どうも申^{もう}し悪^{わる}い事^{こと}だが、関^{かん}東^{とう}の手^てが廻^{まわ}つて、三^よ百^{ねん}余^ご年^ご後^ごの今^{こん}日^{にち}流^{りゅう}行^{こう}する、所^{いわ}謂^{ゆる}「くわ
んづめ」に逢^あつたのじや無^ないか。其^{その}邊^{へん}は何^{なん}とも明^{めい}確^{かく}で無^ない。

扱^さて、いよいよ大^{おお}阪^{さか}方^{かた}の申^{もう}込^{しこみ}を一^{いっ}蹴^{しゅう}した以^い上^{じょう}、急^{いそ}いで関^{かん}東^{とう}へお味^み方^{かた}の由^{よし}を報^{ほう}告^{こく}しな
ければならぬ。之^これは最^{もつと}も重^{じゅう}大^{だい}な役^{やく}目^めで有^ある所^{ところ}から、蓬^{ほう}庵^{あん}公^{こう}自^{みづか}らお江^え戸^どへ下^{くだ}つて、
家^{いえ}康^{やす}公^{こう}の前^{まえ}に赤^{せき}誠^{せい}を披^ひ瀝^{れき}する段^{だん}取^とりとなつた。

一方大阪方では、使者の返事を聞いて、怒ったの怒らないの所では無い。太閤恩顧の蜂須賀こそ一も二もなく味方とは思ひの外、案に相違の、無二の敵方と知れては憤慨せずには居られまい。そこへ蓬庵公、江戸下向と云ふ報が、問者に依つて伝へられたから堪らない。「己やれ、彼の素ツ首引抜かいで置かうか」と、手ぐすね引いて待構へて居る。それが又、間もなく徳島へ聞えてきた。之れは、家中の中村右近太夫重勝の家臣、長澤義太夫と云ふ者が、諸君もお馴染の、大阪方の豪傑後藤又兵衛基次の甥であるのを幸ひ、使者の後から、密かに大阪へ登らせて、様子を探らせた報告に依るものだ。

さあそうなつては、流石賢君の名有る蓬庵公も、江戸行きの咽首を、グツと押さえ付けられた形で、まご付かざるを得ない。去りとして紀州から廻れば、熊野の一揆が何時蜂起するか知れない形勢であり、他の方面から行けば、其土地の向背がまだ明瞭でない、と云ふ危険がある。此上は、海上を行くより他に手段がないと云ふ結論に落着いて、密かに召出されたのが、藩中随一の船軍の達者、森甚五兵衛村重である。そこでいろいろ策を練つた結果、村重が家族を椿泊へ送ると披露して、同苗甚太夫氏純、同く久左衛門貞仍などと共に船を調べて、夜にまぎれて船出したが、海上無事十月十五日、安全地帯である三河国吉田港へ到着。公は、此処から陸上を東へ下つた。

このこと
此事は、余程秘密に行はれたものと見いて、家中の老臣さへも出発の後に至って知つたとの事である。

このあいだ
此間にも城内上を下への大混雑の内に、日を遂うて出陣の準備は着々として調へられて行つた。

いまその
今其の軍容を一見すると、先ず総大将には藩主至鎮公、軍監は所謂国老七人衆の

いなだそうしん
稲田宗心（左馬充植元）、林道感（図書助能勝）の兩人。其外、稲田修理亮示植、

どうくろうべ
同九郎兵衛植次、中村右近太夫重勝、山田織部佐宗登、樋口内蔵助正長、岩田七左

えもんみつなが
衛門光長、なんどを始めとして、騎馬の侍には先手頭分三十一騎、鉄砲頭分十七

き
騎、馬廻頭分七十一騎、小姓中頭百二十五騎、運使侍十五騎、其外臨時雇ひの

ろうにんしゅうまでそうぜい
浪人衆迄総勢九千百余。運使には、棟梁（輸送指揮官）森甚五兵衛村重、並に同苗

じんたゆううじずみ
甚太夫氏純、以下一族郎党百余人、之には一千人の加子（船夫）が付属して居る。

か
斯くして戦時編成の軍隊は出来、責具（軍器）兵糧も悉く集まって、いよいよ

けいちょう
慶長十九年霜月五日（？）の朝まだき、天下分目の合戦に参加すべき将卒は、之れ

かぎ
や限りの覚悟に緊張し切つた面持を並べて、晴の船出に就く。船は至鎮公座乗の住吉

まる
丸を中にして、大船小船二百余艘、陸からは出陣を祝ふ関の声、船には勇ましい船太鼓

おと
の音、軸櫓相衝むで堂々津田川口を後に一路泉州堺を望んで進んで行く。

九千余の軍勢を乗せた船は一旦兵庫に入港。二日間碇泊。斥候を放つて、堺方面を探索させたが、「敵影無し」との報を得て更に船を進め、十一月九日泉州石津（今の南海線濱寺公園の北）から上陸。翌十日早朝ここを立つて堺に着いて陣を構へた。

これより前、堺、住吉辺の大坂軍は、藤堂佐渡守高虎勢に依つて掃討せられ、大阪の西部は播州、岡山の池田兄弟が占領して居た。更に東軍の大部隊は四方から進軍して、大坂城包圍攻撃の隊形を取つてジリツジリツと押寄せ。茲に於いて、我が徳島勢も更に陣を進める必要が起こつて、同月十二日、摂州勝間（今住吉区玉手町）に陣替と云ふ事になつたが、其時、至鎮公から村重に送つた書状が、一寸面白いから挙げて置く。

急度申遣はし候 明朝早々じんがへにて人人候間此状参着次第其元に有之船ども不残、今夜中には相まわし可被申候萬一般参るまじく候はば加子百人かたなをささせ其方 召連れ今夜中に必可参候左候はば長柄十本船中に在之てつぼう半分加子に持たせて可参候（下略）

十一月十一日

阿波守 至鎮（判）

森甚五兵衛殿

とある。船漕ぐ外には刀をぬく術さへ知らぬ船子共に、刀をささせ、鉄砲を担せて
威容を張ったトリツクも面白いが、如何にものんびりとした、昔の戦の様が、目に見
るやうで可笑しく思はれる。

やがて、陣替は予定の如く十二日に滞りなく行はれた。此所に、東軍の総大将
徳川家康並びに秀忠、両公は大阪に到着。茶白山と岡山に其本陣を据へた。此時、
家康公から至鎮公に対して、「其方の家中には、文禄、慶長の朝鮮征伐に船軍を以て
大功を立てた、甚五兵衛村重を初め、森一族の者共も在る事なれば、此度は木津口から
城中への通路を止める様に申付る」と云ふ命令が下った。(村重は、朝鮮陣直後
に家政公から軍状を報告する使者として、曾て大阪城に於いて家康公に謁見して居
る)。

さて、此命令を遂行するには現在の責具では到底十分でない。ソコで俄に、阿波へ取
りに戻す事になって、此使には森甚太夫氏純が乗船して其指揮に当る事と決した。
当時の戦陣には、何な品物が入用で有ったかを知る為、モウ一度其時の至鎮公の
書状の一部を引いて置く(村重宛)。

甚太夫 罷 戻 候 間 申 遣 は し 候

一 むく板有次第

一 米参着の半分爰元へ罷越すべく候

一 大豆有次第

一 竹、なわ、たはら有次第

一 かちすみ、くろがね有次第、此外何にてもしより（仕寄）の道具に可成物早々

堺迄積廻し可申候云々

此頃に、幕府方の海軍は、志州鳥羽の城主丸鬼長門守守隆を将として、軍船小船五

十余艘を以て、川口の大坂方海軍を襲うて之を破り、完全に港口を封鎖した。

勝間へ陣替に従って藩船は田川（地名今不詳）へ移したが、現今も見見る如く、此辺の

海岸は何処も遠浅で、船の繫留に適しないのみならず、軍器兵糧の陸揚げにも困難

を極めるから、どうかして川筋へ入れたいと思案を廻らした結果生れ出たのが、徳島勢

をして赫赫の名を成さしめた、穢多ヶ崎の砦。位置は確に分り兼ねるか、今の南区三

ツ寺説と、西区立花通説の両説があるが、筆者は、最も正確と信ずる古文書に拠って

後者の方を肯定する。

砦乗取りの計略は、船舶に対する直接責任者である、森村重の手に依って、日夜研

究されて居たが、遂に十一月十一日の夜、密かに砦近くの川筋に小船を乗り入れ乱杭

数本を抜き取ったが、砦の兵は一向気附かぬ様子に、「べた」と計りに其儘引返して、

勝間の本陣へ向かった。バラックの本陣では、至鎮公の前に老臣達が額を鳩めて、ア

レかコレかと攻口の軍議を凝らして居た。其処へ突然現れた村重が、「殿様、

穢多ヶ崎の方へお馬をお出しなされ。己が取ってお上げ申さう」と、心安氣に申出た。

驚いたのは老臣達だ。「コレ甚五兵衛殿、軽率も時にこそ依れ、ちとお慎みなされ。

殊にあの穢多ヶ崎こそは過ぐる天正年中、織田信長公、石山本願寺光佐上人と合戦

の砌、西国方からの兵糧を陸揚げせし無類の要害。流石信長公様の名将も、「此合

戦中、第一の難関は、穢多ヶ崎なり」と仰せられしと承る。これ程堅固の要害が、

何として我等が乗取る可きや」と聊かも取合はぬ。村重独り語の様に、「如何にも、

天正年中には要害かも知れ申さぬが、今は要害でも何でも御座らぬ。惣じて合戦も

城責も其大将と時節に依つて、要害ともなり不要害ともなる事を、各々方がご存じ無

ければ仕方がない。何時迄も長詮議して、他所の陣に先を駆られ、後悔召さるが氣の毒

な」と云い放せば、老臣中の短氣者、中村重勝クワツと腹を立て、「甚五兵衛、其方

老耄して、弱年の殿に血氣の勇をお進め申し、晴の大軍中で恥を売らせる所存なる

か」と詰寄れば、村重騒がず、「イヤ、甚五兵衛は人の力は借り申さぬ。殿のご出馬さ

へあれば、己が一手で乗取り申さう。扱て扱て各々方、常の勇氣は何処へ遣られた。

今度の合戦こそは天下の武士を味方に持ち何を恐るる所が御座らう。例令一寸でも人

に越ゆるが勝で御座る。やり損なつたら、己一人を殺せば済む事」と、双方次第に色

めく気色に、至鎮公は声をかけ、「其口論無用に致せ。甚五兵衛が申す所も一理有

り。され共大事の戦なれば、明日実地検分の上取極めて然るべし。今日は之にて一同

休息致せ」と今ならば、「議長散會を宣す」と云ふ所。流石に主人の言葉に一同鳴を

静めて退散した。此夜再び至鎮公の内命で村重が召された。さて公の胸中に何んな計画が沸いたやら。

【三】

深夜内密に召出された甚五兵衛村重は至鎮公の本陣へ出た。其席には大阪陣中、至鎮公の後見役たる稲田丹波吉勝（吉勝は稲田宗心の弟。曾て瀧川左近将監一益に仕へ、武勇の誉あり。今度蓬庵公の命に依つて出陣）唯一人侍座して居た。

至鎮公は村重に向ひ、「先刻、穢多ヶ崎の砦乗取の事を申出たが、其方には何か考へが有つての事か」と尋ねられる。村重は「去ればで御座る。甚五兵衛此程より日夜砦を考え見る処、炊烟次第に少き様子に相見に申せば、定めし砦の人数を透かしたりと覺に候」と答ふれば、傍より吉勝が、「夫れも尤もなれ共、砦の兵糧を本城にて炊ぎ、態と人数を少なく見せて敵を誘ふと云ふ手も御座れば、猶何か外に慥とした見込は御座らぬか。」「さん候、此頃水鳥が頻りに砦近く群れ遊び、殊に今夜も砦に近き乱杭を四五本抜き捨て候へども、誰防ぐ者も無き有様」と語れば、忽ち吉勝、扇を開いて村重を煽ぎ立て々、「甚五兵衛、穢多ヶ崎の砦は最早其方取済ましたるど。殿、早々茶白山へ御伺ひの上、急に甚五兵衛を先手として乗取り玉へ」と勧め申せば、至鎮公も大に喜び、種々謀略の密談が有つて村重は退出。更に乱杭抜取の準備に夜を徹した。

翌十八日早朝、至鎮公は稲田示植、中村重勝、森村重と小姓四五人を召連れて木津辺の持場を見分。其儘茶白山の総本陣に伺候した。至鎮公、其日の出立は平服の上に革羽織と云ふ、およそ戦場には似合しからぬ風態だ。扱て茶白山の本陣の内外には厳しい甲冑に身を固めた戦時武装の将兵が、雲霞の如く群がって居る。其中へ此風態だから目に立つのも尤もだ。やがて彼方此方でヒソヒソ聲が聞える。「オヤオヤ阿波守はこの非常時（と云ったかどうだか）にアノ風態は何事ぞ」。中には氣早の連中は無意識に柄へ手が行って居るのもある。家康公、早くも之に目を止めて、「オオ阿波守か。何か用事有って来られたか」と聲が掛かる。至鎮公、「ハツ此頃に穢多ヶ崎の砦を責取り申し度、只今見分に罷越候。何卒我手へ御許し願ひ度」と申せば、家康公少時思案の末、「其願ひ最も至極なり。去ながら彼所は、昔より名だたる難攻の場所と聞けば、猶淺野但馬守（長晟、和歌山藩主）ともよくよく談合ありて、両軍にて越度なき様攻めらるべし」

「畏まって御座る。」と至鎮公は御請した。すると再び諸将の間にざわめきが起った。

「阿波守は氣でも違ったか。あの難所を軽々しく御請するとは」だの「阿波勢に穢多ヶ崎を任せるなどどうかと思うな」などと陰口が盛んに行われる。

家康公之を聞きて獨語に

「ハテあの様子では、阿波の若武者共、必定穢多ヶ崎を手に入れたるぞ」と云ったので、此の騒ぎが収まったとの事である。

やがて至鎮公は陣所へ帰着。諸将物頭などを召集して、砦乗つ取りの大評定を開いたが、最早將軍の許可まで得た以上、誰一人異議を稱ふる筈もなく、即ち明十
九日未明を期して攻撃開始。船軍の先手は森村重、陸の先手は稲田示植、中村勝重両
人。大物見の如くして揮寄せる事に一決した。至鎮公は更に村重を召して

「今日御前に於いて浅野但馬守と談合せよ」との上意なれば、「今夜其方浅野の陣所へ
使者に参るか如何に」、との尋ねに村重、「お申附なれ共、船の駆引は他に漏れては面
白からず候。お使者は明朝に至つて余人を御遣はし然るべし」と答へて、夜に入
つて更に穢多ヶ崎へ忍び寄り、水竿に鋸を取付けて川底の乱杭を切取り、蜘蛛手に張
つた水中の張繩を切払つて引上げた。

明れば十一月十九日まだ明けやらぬ朝の闇、折しも立籠むる川霧を幸ひ、村重は部下
の者共を船に乗せ、己は一族森長左衛門元直、同七兵衛等と共に伝馬船に打乗り、昨
夜切残した乱杭を抜き取る折柄、砦方の船将樋口淡路守雅兼、中村左右衛門一成の
見廻り船にヒヨクリ出会った。あはやと云ふ内、村重等が乗った小伝馬を三方から追取
り巻き、既に危しと見へた時、別船の鈴江加右衛門長定漕ぎ寄せ、縦横無尽に敵と
戦ひ漸くにて追退け、村重は之に依つて九死の難を免れた。

扱て此上は猶豫ならじと船を返して、陣中へ馳せ戻り至鎮公の出馬を請うた。之と行違ひに、浅野長晟の陣所へ使者に向ふ山田清左衛門が村重の船へ便船を頼んで来た。

船に留守居の鈴江長定、折悪しとは思つたが、お使者なれば詮方なく浅野の陣所へ送り着け、船に残つて待つ間に浅野方の様子を見れば、早や出船には間もなき気色。長定頻りに焦立つ所へ漸く山田が帰つて来た。見るより長定聲高く、「斯様の時節には寸時も早く帰るものぞ。何を思つて暇取るぞ」と散々に罵れば、山田驚いて船に飛乗り小警ながら、

「長定其方は何を思つて左様にセワルぞ。浅野殿のお返事には、やがて当方より人を遣はし、申合せの上明二十日早朝攻め入り申すべしとの事なれば、左程急ぐにも及ぶまい」

と答ふる内にも、浅野の方には、既に船の艚に早緒を掛け、忍び忍びに鎧武者を乗込ませる様子。さては此方を出し抜いて魁せんとの企に極まつたり。油断ならじと長定、加子をせき立てせき立て漕ぎ戻す。扱て愈々穢多ヶ崎砦の攻撃戦、徳島勢、紀州勢、活躍の場面は之より展開される。

【四】

鈴江加右衛門長定は、浅野の陣へ使者に立った山田清左衛門を船に寄せ、船子を励まし励まし漸く元の岸へ漕寄せれば、待兼た村重を初め、同苗長左衛門之村、其外森一

族部下の軍兵を急いで乗込む。此時浅野勢方は己に砦を直指して突進して居る。見るより長定溜り兼ね、船の舳先に罷り出て持ちたる旗を振りかざし「ソレ浅野の船に乗り抜けよ」と懸命になつて指揮すれ共、浅野の船は先に漕ぎ出した事なれば、漕ぎ共漕ぎ共程遠く船中の者共齒嚙をして口惜しがる。

村重は、予て斯る事もあらんかと乱杭少々拔残したを浅野勢は少しも知らず、砦近

くの乱杭にグツと乗上げた。此間に、此方の船はソレと計りに漕ぎ抜ける。長定喜び

踊り上り、「ソレ見た事か」と大聲に浅野勢を嘲笑へば、浅野勢腹を立て鉄砲を構へて

村重の船を打たんとする。アワや同士打と見いた所、浅野勢の先手、大将亀田大隈

(元、三十郎といひ、上杉景勝に仕へて一萬石を領したが、今は浅野の臣として一

萬五千石を祿せられ今度の陣の先手大将である) 聲を掛け、「阿波の船は川の案内を

心得たればこそ此方の船を漕ぎ抜けたれ。案内知らぬは此方の落度。必ず鉄砲を放す

べからず」と制して打たせず。此方はいよいよ砦に迫れば、砦の兵ども、鉄砲を釣る

べかけて拳下りに打ちおろすを物ともせず、ドツと上げた鬨の聲と諸共に、巢口を

揃へて打放す。此勢にひるむ所を予て用意の手鉤を打掛け打掛け、塀を倒して乗込

むだ。「突込め！」豆を煎る様な小銃の音、叫び聲、混乱大混乱、砦に近い民家に

は、誰がつけたか、火炎が空に渦を巻く。

砦の大將クリスチャンの明石掃部助全登は、幸か不幸か本城に出仕して不在。二

千の守備隊は不意の襲撃に右往左往。捗々しい手向ひもせず先を争うて番船に取乗り

取乗り逃げ出した。船軍の一番乗りは、鈴江長定。砦の上に旗指し上げ、「森甚五兵衛
村重家来、鈴江加右衛門長定、一番乗り！」と名乗を上げた。だが惜しい事には之は失
敗だ。「蜂須賀阿波守」と名乗る可きで有ったのだ。長定嬉しさに少々周章だと見
いる。之が為に遙かに遅れて来た浅野の旗持ち砦の上に飛び上り、「浅野但馬守」と名
乗りを挙げんとする所を、至鎮公の旗持、岩崎与兵衛が駆附けて、浅野の旗持を踏み
倒し、旗指し上げて大音聲。「蜂須賀阿波守至鎮一番乗！」と云ふ時、浅野の旗持
再び起上って「浅野但馬守長晟一番乗！」と叫んだ。長定怒って、浅野の旗持を押
倒し、「此方コソ一番乗に相違なし。其旗引け」と争ふ。折りしも村重の手の者、撫
養甚六走せ来って浅野の旗持にムンズと組付き、ドツと許りに矢倉から落ちた。
夫重勝の一隊、二の手には山田織部佐宗登、樋口内蔵助正長、堤安右衛門貞敏、山田
清左衛門等の勢合して二百余人、民家に火を掛け、土煙を上げて？地に押寄せ、逃遅
れた砦の兵共追詰め追詰め打殺す。やがて至鎮公出馬。浅野の陸勢（総勢一萬と伝へ
る）も次第次第に詰寄せ、さてまた船軍の方では、浅野の軍勢追々乗込み一番乗の
争論何時果つべしとも見えず。

此時、家康公から派遣の横目（審判官）佐久間河内守到着。此有様に大聲上げ、「口
論無用。阿波守の幟の一番に入りたる事疑ひなし」と宣告した。其時至鎮公を始
め、陸地寄手の面々人数を纏めて入来り、一同聲々に「長定誠に比類無き働き」と

誉め立てれば、浅野勢猶も怒つて口々に罵り騒ぐ。至鎮公は河内守に向ひ「僅に砦一つの為に両家相争ふと有つては、後の代の聞いも如何と存じ申す。長晟殿御望みと有らば、當砦は相乗と言上相成る共、當方に於ては、厭ふ所にあらず」と申せは、河内守「天晴れ。武道の御志誠に床しう存ず。但し、此穢多ヶ崎に於ては貴公御一手乗たる事、河内守しかと見届け申した。それに引替え他の陣の功名を奪はんと武士の本意に非ざる致し方」と、浅野方を罵れば、止むなく口を噤んで静まった。

さて今日の戦に晴の働きをした者の内には、前に記した外新見太兵衛(村重の手)、井後新次郎(旗奉行)等の勇者が有り、名譽の戦死は、中山源兵衛一綱一人で有った。其所でいよいよ至鎮公、一手乗つ取と決して、直に大多和長右衛門外一人(氏名伝はず)を茶白山に遣はし、本多上野介正純を経て此由を言上せしめた。家康公の喜びは大変なもので、直々長右衛門を呼び出し戦況を物語らせ、長右衛門は御料理頂戴の光榮に浴して砦へ帰った。

続いて將軍家の上使として、横田甚右衛門、真田隠岐守、安藤治右衛門、本多籐四郎の四名を砦へ遣はされて、「往昔切所第一の要害、穢多ヶ崎を乗取る事、前代不思議の高名、諸軍に知れたり。砦には人数を置き、早々引取休息然る可し」と云ふ上意を伝へた。至鎮公の高名は一軍羨望の的となった。三度勝鬨を上げて引上げて来た。至鎮公の陣所へは、茶白山の本陣から千人前の弁當がワツシヨワツシヨと担ぎ込まれる。陣所は、今や祝捷の喜びに溢れて、歡聲笑聲が湧き返る。砦の守備を引

受けた森村重は一族郎党を要所要所へ配置して固める所へ、穢多ヶ崎陥落と聞いた付
近に露宮の軍卒共、我先にと争って、砦を囲んだ塀を片端からブツ壊して持って行
く。火事場泥棒イヤ戦場泥棒。但し之は無理も無い。時とも十一月下旬と云へば今の
十二月下旬だ。夜の寒さは焚火が無くては仮睡も出来ぬ。鎧櫃から槍の柄まで焚火の
材料に投げ込んで暖を取ったと云はれる程だ。守備隊では、制しても叱っても泥棒兵
は刻々人数が殖える計りだ。流石の村重も遂に我を折って至鎮公へ上申。尤もと有つ
て、今度は稲田示植、中村重勝の一隊何百人かと交代する事になった。話は更に進ん
で、徳島軍の豪勇振りを裏書した伯勞ヶ淵戦と岩見重太郎氏の失敗談に移る。

【五】

穢多ヶ崎の砦占領に成功した我が徳島勢は、意気衝天の勢ひである。其翌日に、
責具運使として徳島へ渡って居た森甚太夫氏純（甚五兵衛村重の娘婿）が帰ってて、
足摺をして之に出会はなかつたのを残念がった。其時村重が之を慰めて、「まあ左様
悔むにも及ぶまい。高名を立てるはまだ之からだ。実は斯う云ふ考へもあるのだから、
と胸中の秘密を打明けたのが、伯楽淵の砦奪取の計画で有った。

伯楽淵（別に博勞淵、馬駆郎淵などの字を用ひる）の位置は、今の雑魚場付近と云ふ事
になって居るが、此辺の地形は徳川時代にスツカリ改変されて今とは大違つて居る。

大毎（大阪毎日新聞）大野静馬氏著の「大阪陣」にも、船津橋邊から下はグツと廣がつ

て本田三丁目邊まで淵を成して居り、川口町も水の底でアノ江の子島と葦島が横たは
って居た、と云ふのだから云々とある。之に依つても大体の想像が附く。また筆者の所
蔵する享保五年の文書には、「伯樂淵砦の所は當今の大阪ナヤ町西の詰南角な
り。或人云ふ。廣義寺（俗に願教寺と云ふ）は是れ伯樂淵砦の地なり。元来一向宗の
寺地なりけるを、砦に取立つる由、大阪冬陣の後、至鎮公拝領ありて廣教寺へ下さ
る。地床一万坪余（中略）。今は世俗願教寺堀ナヤ町と云ふ」と有る。之で見
ると、砦の位置は現在の西区薩摩堀北之町から、阿波堀五丁目邊一帯の地域で有つたら
しく思はれる。

扱て村重、氏純の二人は穢多ヶ崎の例に慣つて或夜密かに小船を乗出し、伯樂淵の
乱杭を抜きに行った。所が今度は前と違つて警戒が頗る嚴重。砦の真下に船を寄せ
て居たから弾に當らず無事に引上げて来た。此時には戦線が余程縮まって、至鎮公の
陣所は穢多ヶ瀬へ移つて居た。其所へ兩人が出掛けて、至鎮公に伯樂淵の砦責取り
を勧めた。至鎮公は、「其儀に付ては余も兼々心附かぬでは無いが、見渡す所砦の向
かひには葦島が有る。アノ島へ人数を分けて前後両面から攻め立れば、勝利は掌を
指す如くで有るが、惜い哉人数が足りない。兎も角も一応茶白山へ出て願つて見やう」
と云ふ事になって、直に茶白山へ出頭。家康公へ此趣を述べて、「熟れの手にても
一隊葦島へ御廻し下さらば、必ず彼の砦を乗取り申す可し」と申上た。家康公も、
穢多ヶ崎の手並み知つて居るから、一も二もなく許して、先以て実地を見分させ様と云

ふので本多上野介正純、水野日向守勝成、永井右近太夫直勝の三人を葦島検分として
差遣はされた。

此葦島と云ふのは、大阪研究家の説では、現今の松島遊郭の土地だと云ふ事に成つて
居るが、筆者は寧ろ今工業奨励館（元大阪府庁）の有る江の子島の方ではないかと
思ふ。

話はチョツと横道へ外れるが、此葦島検分に付いて一挿話がある。元来此検分には

家康公自身が出掛ける筈になっていた。ソレを早くも聞き付けたのは、城方の軍師真田

左衛門佐幸村だ。好機逸すべからずと手勢を引率して前夜から葦島に船を寄せ、生茂る

葦の中に一夜を明かし、鉄砲を構へて今や来ると待つて居る。そんな事とは夢にも知ら

ぬ検分の船は、上下十艘計り徐に漕いで伏勢の前に進んで来た。ソレツと家来に目

配せしてフツと見ると之は違つた。船に立てた幟の紋、葵は葵だが立葵だ。其外に

は沢瀉と桔梗、オヤオヤと呆れて居る間に船は漕ぎ去つて仕舞つた。幸村は、「古狸

を打ち損なつた」と酷く残念がった相で有る。家康公は此朝出発間際になつて、秀忠

公の意見に従つて俄に中止したのだ。幸村の此策が見事当つて居たらば豊家萬々歳

で、徳川三百年の治政も或は見られなかつたかも知れない。豊家の為には惜しい事であ
つた。

検分の三人は役目を終へて住吉に上陸。茶白山への帰途水野勝成が立止まって、「拙者は堀丹後守直寄と共に此処に止まり、今夜阿波座から砦を攻めたいと思ふ。この両所は先へ帰つて、此由大将へ申上らねたい」と云ふ出した。永井直勝が、「今日の役目は我々三人に命ぜられたものだ。其内二人が帰つて一人残ると云ふ事は大将の命に反く訳で、左様な事は以ての外だ」と遂に二人の間に激しい争ひが初まった。本多正純が割つて入り、「マアマア」と双方を押へなだめて打連れて帰る。此時、兼て氏純の入れて置いた間者が之を聞取つて直ぐ報告した。さあ大変。ここ迄苦心して他の陣から取られては堪らないと、大急ぎで船の準備に掛つた。茶白山の本陣では、家康公が三人の報告を聞いて、「去らば葦島の討手は、誰彼と申さうより勝成其方罷り向へ」と命じた。水野勝成は、ツイ今しがたの喧嘩で、今更すぐにウンと承知が出来にくい羽目に陥つて居る。ソコで、「彼所は船無くしては勝算覚束なく存じ申す。手前の陣には折悪しく船の用意なければ、此役目は余人に仰せ付けられたい」と逃げた。家康公は不興氣に一座を見廻して、更に適當の人物を物色した結果、其選に當つたのは濃州大垣藩主石川主殿頭忠総で有つた。「仰せ畏まって御座る。但し、一応実地検分の上御受致したい」と答へて直に前の三人の案内と葦島検分の上引受けた。之で、徳島大垣両師団連合の攻撃軍が出来上がった訳だ。

【六】

伯耆ヶ淵の戦ひは、先ず友軍石川主殿頭忠総の大垣勢によって火蓋が切られた。以下「石川家伝」に據つて其戦況を伝へやう。

十一月廿六日の午後、葦島に陣地を構へた大垣勢は、背丈けに余る葦の中から先づ最初の一発を川向ふの砦に見舞つた。敵も負けずに応射する。其内に夜に入つて生憎の

大雨に成つた。殊更ら満潮時になって来て水は膝を没する程に及ぶ。丸で上下からの

水攻めだ。此中に一同は濡鼠になつて夜を明かす。其間にも、砦の棲楼から盲射ち

に終夜射ち続けた。漸くの事で夜が明けて総勢洲先まで押出し、砦と激しい小銃戦

が初まる。隙間の無い敵の弾で味方の勢には死傷者が続出して、遂には忠総の傍らに

侍した旗持ちまで胸を射抜かれて仆れる。這んな事では、味方が損害を受ける計りだと

忠総は焦立つて、川を渡れと頻りに下知するが船がない。引潮になれば馬でも越せる

が、馬は悉く住吉の陣に残して間に合わない。其時の事だ。川の上流から破れた一

艘の小船が流れて来た。之れ幸と坂部與五衛門、神田九兵衛、中里弥右衛門、大河内

左右衛門、浅井左次衛門、古川弥市、鹽屋源五郎、坪内七郎兵衛等八人が取り乗つた。

之が後世に有名になつた、所謂石川家破船八人衆だ（一本には七人衆となつて居る）。

槍の柄を竿に代へて漸く中島まで漕ぎ寄せたが、折柄の満潮で櫓が無くては渡れな

い。其内に徳島勢の先手は二艘の船で砦へ漕ぎ付け、阿波座口から攻め入つた。程経

て潮が引いたので八人の士も砦へ漕ぎ付け、敵に小勢と見られぬ様、大聲揚げて土

佐座口から攻めて入る。僅八人とも知らぬ敵は、抄々しくも防ぎ得ず構へを捨てて退

く中に、後殿した一人の大男が踏み止まって矢を放った。一の矢は弥市の草履に、二の矢は七郎兵衛の射向けの袖に裏搔いて突立った。八人の者は之にたじろいで引返し、棲楼に登って頻りに味方の勢を呼んだ。其時東の方を見れば、大中黒に耳付けた旗を押し立てて人数四、五百騎計り砂煙を揚げて寄せて来る。ハッと驚いて棲楼から飛降り飛降り東の木戸を固める。此様子が葦島の勢からは手に取るやうに見へる。忠総いらつて、「彼等を討たせては末代までの弓矢の恥辱ぞ」と躍り上がって焦る折柄、家康公の命に依つて九鬼長門守から一艘の船を廻して来たから、直に之に人数を乗込ませ土佐座口から乗入った。此船が来たのは、前日水野勝成が船無くしては勝利覚束なしと云つた為に、家康公が九鬼守隆に命じて、蜂須賀、石川に力を合わすべしとて伝法口から兵船を入れさせたのである。

話はこので徳島勢の戦況に移る。十一月二十七日の朝、森甚五兵衛村重は手勢を船に乘込ませ、表面は九鬼長門守と船の打合わせに行くと言ひ拵へて今や纜を解かんとする時、中村右近太夫重勝が駆け付けながら、「我等も其船に乗せ候らへ」と云ふ。船中の鈴江長定、小聲になつて村重に「中村殿は御家老なれば、此船に乗せては此方の高名を取らるる道理。唯だ聞かぬ振りをして早く船を出し申さう」と云ふ内、重勝は早くも岸に着き、船の小縁に取付き乗込まんとする。一同持て余す折柄、村重聲荒げ「其処な腰抜け！着くな放せ」と罵れば、重勝腹を立て小縁を離して躍りかからんとする時、「ソレ今だ」と、一度に櫓を押し立てて岸を離れた。村重の此計略にかか

て「置いてけぼり」を喰った重勝は、怒りに燃いて地段駄踏んだ。運悪く其下に居た川蟹五、六疋ペチャンコに潰された。之は長定の云った功名を取らると云ふ事よりも、先日殿の御前で「甚五兵衛、其方老耄して、弱年の殿様に血氣の勇を勧めて云々」と罵られた、鬱憤晴らしでも有ったらしい。

村重の船に続いて森氏純の船が出る。船の備へは外には竹束を下げ、蒲団に水を浸ませて打掛け、内には幕を引廻し舳先には屏風楯を立て並べ、楯の隙間から鉄砲を打ちながら進んで行く。この氏純の船には、森藤兵衛村近（氏純の弟）、同長左衛門元直、同九郎左衛門、廣田加左衛門元重を始め、手勢五十余人が乗って居る。船が砦に近付くと砦からは乱射乱撃だ。弾丸は霰のやうに降って竹束や楯にバラバラと音を立てる。

此時村重から氏純へ使が来て、「此様子ではとても一気に砦へ乗込み難いから、軍兵共に旗鉄砲を取持たせて砦の下へ忍び寄せ、一度に放せば敵が驚いて引くで有らう。ソレを合図に乗込む、と云ふ策は如何だ」と云って来た。氏純も直に賛成して、二

艘の船から旗、指物に鉄砲二十挺取揃へ、村重の家来、鈴江長定、高田又左衛門

兩人を挺身隊長として旗を巻き指物を伏せて葦の陰を忍び寄り、砦の下に着くと等

しく二十挺の鉄砲を一時にドーツと放して旗指物を指上げた。村重が察しの如く一度に敵はサツと引く。之を合図に船を乗り付け、森一族百余人ヒラリヒラリと飛び下り

る。中にも藤兵衛村近は「一番乗り」と叫びつつ、門脇の忍び返しを伝って飛入る。廣

田元重が之に続く。一番乗の村近は、砦の将校薄田伝兵衛（大将薄田兼相の弟）

と槍を合せて戦ふ内、伝兵衛の槍を受け損じ、胸から背中へ貫通する重傷を受け
た。強氣の村近之にも屈せず槍を手繰って、伝兵衛を突き仆して首を取る。其間に元
重は、砦の門の貫抜き打折りサツと門を開けば、味方は一時にとつと雪崩込む。鳥合
の勢の悲しさに砦の兵共逸足出して崩れ立つ。森一族は之を見て「返せー戻せ」と呼
びながら追駈け追駈け戦ふた。戦ひは今酣だ。斬りつ斬られつ突きつ突かれつ修羅
の巷、阿鼻叫喚の地獄絵巻だ。

【七】

森藤兵衛村近は切角敵を討ち取りながら、重傷の為に立ちも得せざる所へ、氏純
は、アワレ能き敵に出会えばやと槍を引提げ駈け来る。村近見付けて「兄上、藤兵衛敵に
傷を負ひ申した」と云へば、興奮し切った氏純、之を聞き違へ「ナニ敵に出会ふたと
な。能くこそ働け。兄も汝に劣らぬぞ」と云ひながら、駈け過ぐる「本間仁兵衛重
高」と名乗って繰り出す槍に、御参なれと槍を合わす。本間は、名だたる法蔵院流の
槍の達人なれば、氏純も扱ひ兼て持て余す所を、重高胸を狙って突き出す槍先。ア
ワヤ氏純危しと見る瞬間、體を交せば槍は空を走る。氏純、槍を返して石突きを以
て本間の槍を刎ね上げた。本間クルリと廻る所を、槍取り直して左の脇腹を強かに
突く。本間槍を投げ捨て太刀引抜かんとする所を、氏純重ねて咽喉を突く。ひるむ所
を乗掛かり首尾よく首を打取った。之を見た敵兵共引返し、氏純に向かつて来る。氏

純は、首と甲と銀の五尺の月の立物を家来に渡し「早く船へ持って行け」と言ひ捨て、群がる敵中へ躍り入る。

甚五兵衛村重は、敵に人数を見透かされじと砦の下に旗、指物は云ふも更なり。

襦袢、禪までも水竿の先に掛け連ね砦の中に進む。途中重傷を負ふた村近を見つ

け「藤兵衛如何致した」と問へば、「目星敵を討ちながら、重傷故に心に任せ

ず。「何を若い者が、此の浅傷に進み得ぬとは何事ぞ。サア一所に行かふ」と云ひつ

つ、村近を肩にかけ先へは行かず船へ引返す。斯る所へ氏純の家来、首と甲、指物

を持来つて、船なる長定に渡して引返すを村重見付け、「其首は誰が取つた、何人の首

じゃ」と聞けば、家来「主人甚太夫氏純一番に槍を入れ、本間仁兵衛と申す頭分とも

見ゆる敵を討ち取つたる首にて候」と云へば、村重、長定に向かひ「長定其首早く

殿様へ御目に懸け、今の様子逐一申上げよ」と云ひ付け、手負いを船に乗せて引返し

た。

此時氏純は、更に三人の敵に向ひながら阿修羅の如く荒れ廻す。折りしも廣田元重、森

長左衛門元直走せ来り、元重一人の敵を斬る。同時に元直も之を斬る。元重「相討ちは

面白からず。更によき敵に出会ひ申さん」と言ひ捨てて進む。「砦の副将平子主膳貞

詮」と名乗つて槍を構へて出て来る一人、村重が家来新見太兵衛が狙ひを定めて討つた

鉄砲、平子の脇腹に当って怯む所を、氏純が家来、四宮忠太夫（二十四歳）、平子に

打つて掛る。平子は名代の剛の者なれば手負ひながらも四宮に向つて来る。四宮之に劣

らぬ強力なれば遂に平子を討取って首を上げた。大将討たれて残卒何ぞ堪ゆべき。先を争ってドツと崩れるを、ソレ追へと計りに関を作って追かけた。

四宮忠太夫は、手に余る平子を討つて戦ひ疲れ、首を持ちながら川端へ下りて水を飲む所へ、森の手に紛れて入込んだ淡路藩主池田宮内少輔忠雄の船頭、横川次太夫が之を見付け「才若い衆、よい敵の首を取ったな。幸ひあたりに人も無し。己と二人の功名にせう」と厚顔ましい申込んだ。四宮驚きながら「何を申す???や、功名が欲しくば外を掛け」と云はせも果てず、横川は、手下の加子共と四宮に取付き力任せにととうとう首を奪って行った。四宮は、無念と思へど力尽きて遂ふ事も得せず、齒噛みをする計りで有った。

森一族に遂ひ立てられて逃げ行く城兵の中から、小河四郎右衛門と名乗って引返す武者、「敵は小勢ぞ者共返せ返せ」と云ひながら、槍を捻って突掛くるを、氏純初め十四五人引包んで討取らんと競ひかかる中に、森九左衛門が突き出す槍に、小河、頬のあたりをつき掠めり。叶はじとや思ひけん、槍を投げ捨てて逃げ去った。

去る程に、徳島師団の連隊長格で有る中村右近太夫重勝は、森村重の船に乗り遅れ、無念ながらも川端を彼方此方と見廻る所に、森一族、阿波座口より砦へ乗込むと見て、最早堪忍なり難しと鎧甲を着けたままザンプと計りに飛び込んだが、川は案外深かった。水練の心得の浅い重勝は、鎧の為に水中の自由を奪はれ進退極まる所へ、

家来大西在右衛門、長濱儀太夫（一説西宇藤左衛門、馬宮儀左衛門）続いて飛入り、主人を補け砦をさして泳ぎ渡った。重勝には、今日は余程日が悪かった。岸へ上がって物の具の水走らせつと見ると、コワ残念、腰の刀も脇差も水中に抜け落て、腰には鞘ばかり暢気相に口を開いて居る。家来はと見れば、長濱は刀計り、大西は脇差計り残って二人分で漸く一人前だ。重勝は此家来の大小を借り、家来二人は丸腰で淋しい腰を摩で廻しつつ供をする所へ、向ふの藪蔭から手負武者を肩にかけた将校らしいのが出て来る。長濱見るより、「彼れをお討取りなされ」と勧めたが、「ナンのおんな死首取つても無益だ。一足も早く砦の大將に近附いて討つが勝ちだ」と益々足を早める。家来兩人、刀が無いから仕方がない。停車場で財布を落とした形で、名残り惜し気に見返り見返り随て行く。

【八】

話が変わって、砦方の大將、薄田隼人正兼相に移る。薄田兼相は、前名を岩見重太郎と云って大蛇退治や狒々征伐で、映画ファンやお芝居好きの熊さん八つあんに昭和の今日迄ヤンヤと云はせる大衆的豪傑だ。石川勢が葦島へ渡る有様を砦から見下ろしながら、「何の蠅虫奴等が騒ぎ居るわい」と太っ腹を見せて、灘の生一本の満を引いて居る内に日が暮れて雨だ。一杯機嫌の兼相、昔の放浪生活時代の事でも思ひ出したかブラリツと砦を抜けて町のお茶屋へ遊びに出た。町の女等のサービスでスツカリいい心持になって、「ほんにいらいコツチャ。そやないか」と、大阪音頭か何かで大浮れに

浮れてとうとう外泊。夜が明けて見ると此騒ぎだ。ハッと驚いて、俄に其処等の兵隊を掻き集めたのが四百騎ばかり。大中黒に白の耳附けたる旗を真つ先に押し立て、金の大半月の指物を差立てて鹿毛なる馬に金覆輪の鞍置いてユラリと跨り、砦逆襲と出掛けて来た。

此時には徳島勢は阿波座口から、大垣勢は土佐座口から犇犇と攻め入って、完全に占領せられて居た。流石の兼相も叶はぬと思つたか、「よういわんは」と本城さして引上げる。砦の兵と薄田の兵とはゴツチャになって、逃げ出すを追い捲つて、徳島勢は阿波座へ、大垣勢は土佐座へと衝き込んで行く。今日の戦は之で終りを告げて、至鎮公は阿波座の屋敷へ、総勢は陣所へ引取つて、砦の守備は中村重勝に命ぜられた。東軍勝利の戦況は、櫛の歯を引く如く茶白山へ伝令が飛ぶ。或書に「古將軍御感斜ならず」とあるから家康公も喜んだに違ひない。

扱て、いよいよ家康公首実験と云ふ段取りになつて、今日の一番槍一番首として、森甚大夫氏純、同甚五兵衛村重同道して、本間仁兵衛重高の首に銀の五尺の月の立物、甲を添えて実験に供へる。此日氏純の着た一重の袖に、猿の皮の縁取つた陣羽織には所々血がついている。御前の諸将は交る交る引張つて見て、「甚大夫、其方にあやかり度いものぢや」などなど挨拶する。家康公は、本間の首を見て「此本間は、余が幼少の時より能く知つた剛の者。敵ながらも惜しい者ぢや」と落涙したといふ。二番首

としては、藤兵衛村近が討取つた、薄田伝兵衛が首（実は之が一番首だがどう間違つた

か二番首になつて居る。三番首として、平子主膳貞詮の首、横川次太夫が差出す。此
時家康公、首を睨んで聲荒く、「平子、今ぞ思ひ知つたか」と云つた。之は、平子が是
れ迄三度まで家康公に敵対して何時も苦しめられた、云はば目の上の瘤とも称す可き
人物で有つたからだと云ふ。之で首実検は済んで、家康公は横川の主人池田定雄を召し
て、「其方の家来、平子を討取る事神妙の至り。彼者は只今何役を致し居る者ぢや」と
問はれて、池田公も、マサか抱への船頭で御座るとも云ひ兼ねて何とか役を拵へて
申上た。「彼者随分禄を与へて、懇に致し遣わせ」と云はれた。おかげで後に横川は
大禄を与へられた。此陣第一の拾ひ首成金だ。
茲に哀れを止めたは平子を討つた當の本人四宮忠太夫だ。折角の大仕事も無駄骨折に
終つて、剩さへ、首実見に横川本陣へ出頭と聞いて無念遣方なく、途中に要して奪
ひ返さうと主人氏純へ許しを願つた。氏純も之には閉口して、いろいろ宥めるがいつか
な聞かない。止むを得ず至鎮公へ申出た。公は氏純に向つて「忠太夫、此度の事無念
の程は察し入るが、横川の主人池田家は我娘婿なり。池田の家中に功名を立つる者
無くば、此方より力を添えたしと思ふ折なり。此度の事は曲げて此儘済まし呉れよ。
忠太夫の働きは、此方確と聞き置きたれば、孰れ帰国の上は恩賞の沙汰に及ぶべし
と申し遣わせ」と余儀ない公の言葉に、氏純も御前を下つて四宮へ之を伝へ、様々に取
り成して漸く納得をさせた。惜しい事には、至鎮公は、戦後間も無く（元和六年二月
二十六日）逝去。四宮は望みの綱も絶い果てて乱心して死んだ。

所有大阪戦史に、平子主膳は、横川の為に討たれたと書いて有るのは、此顛末が秘密にされたからで有る。気の毒な末路に終った四宮の為に同情に堪へない事である。

身に重傷を負ひながら薄田伝兵衛を仆した森藤兵衛村近は、陣中で養生中、三日の後十一月廿九日、勇名を現世に残して空しく二十八年の一生を終った。遺骸は、森一族の手で雑魚場の某所へ葬られたと云ふ事であるが、此処にも桑海の変が有り、今は繁華の街と化して、又尋ね可き由もない。此伯楽淵の戦ひに、敵の戦死者は侍三人、雑兵三十余人と伝へられて居る。

筆者云、藤兵衛村近及本間仁兵衛の霊は元禄某年、本縣板野郡矢武村莊嚴院（五百羅漢）の森家墓地に葬られ、呉越同舟、今は互にベストを尽くし合つた昔を思ふて、笑つて握手を交わして居るで有らふ。又此役に氏純が用ひた槍と、着用の鎧、甲、並に小河四郎右衛門が捨て去つた槍の三品は、明治四十年頃、当時の学務委員山本某氏の手を介して當市助任小学校へ歴史教育の参考品として森家から寄贈せられたと

伝聞する。扱て次は、徳島軍悼尾の船場夜襲戦の実況に及ばふ。

【九】

穢多ヶ崎、伯楽淵の砦が破れて間もなく、池田勢（岡山）は敵を追崩して、中津川（今の新淀川）を渡り、天満、堂島のあたりへ雪崩込み、南からは藤堂、伊井の大軍が押出して来る。城方では三十日天満、船場の本城へ引上げる。其行き掛けの駄賃に

船場や天満の民家に火を附けた。火は霜月の風に煽られ、止度も無く燃い拡がって浪華の町は火の海だ。友軍の進出に連れて、我が徳島勢も二十九日には船場へ出て、三十日には至鎮公が南の御堂へ本陣を移す。今の大阪市電堺筋瓦町邊から本町通一帯は徳島勢で充滿する。

尖兵隊長は中村右近太夫重勝。小さい乍堀を作り、門を構へて城方と睨み合せて居る。其左右には、池田淡路、石川大垣を始めとして、浅野、鍋島などの軍勢がヅラリと陣を布いて暫くは待機の形勢だ。其儘無為の日が半月程も続いて両軍共に惰気が見へる。

「どうで、寒いでないで戦もこない。暇ぢやと退屈するな。お前はん国の方から何ぞピンが有ったで?」。「イイやピンはないケンド、此間此方から能ピンが有ったケン、岩こし(粟おこし)買ふて送ったといたケン、今頃は倅が喜んで食べよるだろと思ふと、何やら国が恋しいなるがナ」と云った様な、此処等では聞き馴れないアクセントの対話を交しながら兵隊さんは日南ぼっこをして居る。

俄然十二月十六日の夜半過ぎ城方からの夜襲が起った。夜襲隊の隊長は、大野治房、副将は有名な豪傑塙団右衛門。此川筋に唯一つ残された本町橋を渡って、先ず前線の中村陣へブツかって来た。重勝は不意の襲撃に驚きながらも、槍を採って打向ひ、平田治部右衛門と打合ったが、無残や、平田の槍を受け損じて好漢あたら戦場の露と

消へた。其内に第二陣の稲田修理亮示植を初め、其他の陣からも飛出て来て、をめき叫んで戦った。示植の長男九郎兵衛植次も平田治部右衛門と出会って見事討取り、期せずして同僚の仇を取った。植次は今年十五歳。今ならば中学二年生位で野球のバットを引き担いで走り廻って居る年頃だ。

敵は更に踏込んで来た。暗さは暗し、敵味方の区別も付かず、影を便りに斬り付ける。

同士打ちも已むを得ない（城方では当夜「采か」と問えば「采」と答へる合言葉まで作って用意周到だから此危険は無い）。本町筋から堺筋あたり両軍合ふては離れ押しては返し、劍戟の音、最期の叫び、寒夜の街には凄惨な響きが漲り渡る。

此間に井上九郎右衛門は吉田七郎右衛門と、横井十兵衛は服部又右衛門と、四宮与兵衛長次は桑山八郎右衛門と、鵜飼七郎左衛門安長は坪井喜右衛門と戦って相手を討取った。中にも異って居るのは樋口内蔵助正長の娘婿岩田七郎左衛門光長。この人

は戦場を後に、ステキな功名を拾ひ上げるべく相手を探して本町橋まで出掛た。折好く橋の上で敵を発見してイキなり槍を突き出したが、相手の武者はビクとも土ない。突き出す度に小手先のあしらはひで槍の柄をちよいと芴ね上げる計りで身動き一つせず

相手にもならぬ。岩田は驚いて「此奴已とは段が違ふは」と廻れ右して、テクテク帰って来た。強い筈だ。相手は大阪方に去る者ありと知られた神子田理右衛門と云ふ大剛の勇士だった。

一方、隊長稲田示植は、夜襲隊の田村林蔵院と出合て槍を合せたが、稲田は到底田村の敵ではない。すんでの事危い時、城方から引上の号音が鳴って田村が引くのを追駈てエイと一と突き。其時田村は、前線の堀を飛び越へた処だから槍は届かず空を突いた。其儘槍を取直して「己れッ」と投げ付けると、田村も同時に振向いて投げ付けた。槍投げの両選手は双方共に創付いて物別れとなった。

其外今夜の戦に出て名を残した人には、稲田勘解由至政、長谷川小右衛門貞元及び稲田示植の部下の浅井勘十郎、井上吉兵衛、林猪之助などがある。

此船場夜討戦は僅に三十分程で終ったのだが、味方の戦死は二十余名に及んだ。其内分った人名と所属部隊を挙げると、中村右近太夫重勝（前衛隊長）、井上七郎右衛門俊武、斉藤庄右衛門義光、七条弥三右衛門実政（以上稲田修理隊）、村上軍兵衛、立木與三兵衛（以上細山長門守隊）、七条作太夫（長谷川伊豆隊）、山崎藤兵衛（山崎内匠隊）、中村市右衛門（中村右近隊）、本庄治右衛門（倉知兵庫守隊）。

此夜討騒ぎが有った五日の後、十二月二十一日に徳川、豊臣両家の講和談判が成立して、茲に関西の天地をデングリ返した大騒動も一寸一段落が着く事になった。愈々戦争が終つて、何れの陣も暢びりした気分が横溢する。

其頃至鎮公は、茶白山へ伺候して家康公に謁した。公は至鎮公に向つて「誠に此度の戦功感ずるに余りあり。殊に池田宮内少輔の初陣を援けて、家臣に功名を立てさせた

る事、之れ全く我等への志し浅からざる故である」と挨拶が有って、當座の嘉儀として白銀三千枚を授けられ、更に「此頃は孫千松丸（後に忠英公と云った至鎮公の長男）紐落としのある時と覚へる。此祖父にあやかる様」と云って、自ら上帯を解いて渡した。至鎮公が退出すると、続いて上使が来て、肩衣、袴、呉服一重、黄金三百両、千松丸紐落としの祝儀として持参した。此処で家康公が千松丸を孫と云ったのは、至鎮公の夫人（後に敬台院と云った）が家康公の娘となつて居るからで、実は此夫人は家康公の曾孫に當る人だ。之れは少し説明を加へぬと分りにくい。即ち家康公の子岡崎三郎信康の娘が小笠原兵部太輔秀政の夫人で、其娘が至鎮公の夫人だから曾孫になる訳だ。之も家康公慣用の政略結婚の一つで有ったかも知れない。

【十】

至鎮公は帰陣の後、家康公から拝領の白銀三千枚を、今度の戦功の多寡に依つて當座の褒美として将士一同に分ち与へた。越へて廿四日には、家康公の恩賞授与が有つた。中にも御感状は、當時の最高勲章として拔群の戦功者に与えられるもので、今の金鷄勲章にも比す可きもので有る。

其当日恩賞に預かる人々は、何れも包み切れぬ喜びに面を輝かしながら茶白山へと急ぐ。家康公の御前には、諸将士が雲のやうに居並んで今日の式典に一段の光彩を添えて居る。此度の軍監稲田宗心、林道感を召して、家康公の挨拶が有って黄金

百両宛てを給ひ、稲田修理亮示植には御感状並びに元重の刀、同九郎兵衛重次に
は御感状並びに兼光の刀、山田織部佐宗登、樋口内蔵助正長には御感状、次に森甚
五兵衛村重を召して家康公は「オオ武功男久し振で会ふたの。今度も亦粉骨の働き感
心致す。サア此羽織を着して前へ出よ」と云つて、陣羽織を与へられ、村重は直に之
を着て進んで御感状を頂く。岩田七左衛門光長、森甚太夫氏純兩人には御感状と呉
服を授けられた。左様して家康は其翌廿五日京都へ引上げた。

間もなく其年は暮れて、慶長二十年の初春を陣中に迎へた。正月十一日岡山（今の
東成区勝山町俗称御勝山）在陣の將軍秀忠公は、至鎮公を召して、御感状並びに
「松平」の姓と左文字の刀を授け武功の諸士にも夫々恩賞を与へた。

稲田 宗心 黄金百両、

林 道感 同

稲田修理亮 御感状、長光刀

同九郎兵衛 御感状、延壽刀

山田織部佐 御感状、

樋口内蔵助 同

森甚五兵衛 同

岩田七左衛門 御感状、呉服

森 甚太夫。 同、 同

森氏のうけた感状、

序ながら此所に云ふ御感状の一二を写して読者の参考に供へやう
（返点は読者の便宜上筆者の添へたもの）。

今度於大阪伯耆淵合鑓追崩敵討取頭之條粉骨之至感思召候也

十二月廿四日

（家康公花押）

森甚太夫どのへ

今度於大阪表穢多並伯耆淵竭粉骨之條阿波守達高聞御感思召候也

十二月廿四日

（家康公花押）

森甚五兵衛どのへ

（因みに、森甚太夫氏純の御感状二通（家康公、秀忠公）は、当時陣中に用ひた行厨と共に、大阪戦史資料として大阪城天守閣へ出陳し、目下一般登閣者の展観に供せられて居る）

斯くして將軍秀忠公は同月十九日伏見へ引上げ、諸藩の兵も続々本国へ帰り、我が徳島勢も亦至鎮公に随って凱旋し久々で軍装を解いた。

以上を以て、大阪冬陣に於ける徳島軍活躍の主要を記し終った。本編に現れた藩士の人々の内二三を除くの外は、其後悉く生前の勲功に依って藩祖と供に縣社国瑞彦神社に齋き祀られ、国家の宗祀として県民の限りない崇敬を受くる事となった。地下の英霊も必ずや宝祚の無窮と国家の隆昌を守護し奉り、更に我徳島県の弥栄を天翔り国翔り長しへに守り給ふ事で有らう。(終)

(補遺)

戦後の至鎮公は、此役の功に依って元和五年淡路国七万石を加封せられ、二十五万七千九百石となつて、(此時池田忠雄は其兄忠継の後を襲ふて因州鳥取三十一万五千石に封せられた)お家万々歳の喜びの声は阿淡両国中に満ち溢れた。然るに間も無く、かの穢多ヶ崎に戦ひを共にした浅野長晟が、此度の戦功に依って芸備両国へ転封、四十二万六千石を賜はつたと云ふ報が城中に達した。折りしも公は入浴中であつたが、此報を侍臣から聞かれて、只だ「左様か」とのみ云はれたが、胸中甚だ平かで無かつた。「フーム」と唇を嚙んで血さへ流れたと伝へる。(今公園千秋閣の庭上に在る「義傳さんの踏折り橋」の伝説も、或は此辺の事から生れて誇張されたのでは有るまいか)。

夫れ以来公は快快として樂まず、遂に天下掌握の大計画をさへ起されるに至つたが、(此事に就ては徳川時代秘中の秘として取扱はれた。確かな文献が筆者の手許に在る

が、長くなるから又の機会に申上りたい。惜い哉、天此英雄に命を籍さず、雄圖空しく
実現を見るに至らずして、翌元和六年二月廿六日行年三十五歳の若きを以て逝去せら
れた。遺骸は助任町興源寺蜂須賀家歴代の墓地に葬られ、諡は「俊徳」
院殿前阿州大守四品心嶽義傳大居士」と云ふ。

蓬庵公の書簡

次の書簡は、大阪滞陣中に在江戸の蓬庵公から村重、氏純の兩人へ遣はされた物で
有るが、當時、君臣の情誼が如何に厚かったかを知る為に、序ながら写して置く。

舊冬十九日書状同晦日に下着令披見候何も何事なく奉公の由満足此事に候師走ゑた
が峰並にばくらうがふち砦攻の刻兩人前後大手柄仕候由阿波守かたより一々申下し候さ
りとはさりとは侍の？灌頂（？）何事かこれに過ぎ候はんや名譽の至に候藤
兵衛（村近）事ふびん成儀且又其節高名仕候長左衛門（森元直）加左衛門（廣田元重）
手柄の由懇に可被申聞候爰元へも大きに相聞へ日本の覚へを取り候弥無油断奉公専

一に候

恐惶謹言

（慶長二十年）正月朔日

ほうあん

もりじんごべえどの
森甚五兵衛殿

もり
じんだゆうどの
森 甚太夫殿

(括弧中の文字は筆者が加へたもの)